偉大な作家インジャンナシの著作の手稿（写本）を島国まで探索する

ビャンバスレン・ヒシグスフ
（Бямбасүрэн ХИШИГСҮХ / Byambasuren KHISHIGSUKH）
（モンゴル国立大学総合科学部人文学系文学芸術学科准教授）

聖主チンギス・ハーンの黄金氏族の系統のタイジであるワンチンバリーン・インジャンナシ（Wangčinbala-yin Inǰannasi, 1837-1892. 名前の Inǰannasi は「叡知の余燼を持てる者」という意味のサンスクリット語で幼名はハスチョロー）は、19 世紀モンゴルの著名な文学者であり文化人であった。

内モンゴル自治区の国境通関の小都市開魯（Kailu）で、著名な文学者にして文化人のウーリンガーギーン・ブフヘシグ（Ülingγ-a-yin Bökekesig, 1902-1943）は、「東モンゴル文学社」というモンゴル文学を編集発行する出版社を主宰していた。この出版社の書庫には、青紫色の絹布で装丁された〔総頁数〕12,000 頁〔ハイシッヒによれば 2,000 頁〕からなる 12 巻本の書籍が出版され保管されていた。それがまさに、偉大な作家インジャンナシの『大元帝国興隆の青き年代記（漢名は青史演義）』という、芸術的な歴史叙事詩風の作品であった。インジャンナシの長編歴史小説『大元帝国興隆の青き年代記』は 120 章にわたって書かれたと言われており、明代から清代まで、すなわち 1644 年の出来事まで書かれたと、現在まで西トゥメドのハラチン・モンゴル人たちは口頭で伝承したり書き記したりしてきた。ブフヘシグはシレンガーという人物を特別に任命して北票（Beipiao）県〔インジャンナシの出身地で現在の遼寧省朝陽市内の東端に位置する北票市〕に派遣し、偉大な作家インジャンナシの手稿（写本）や版本を探索収集し、その出版、保存、継承など創造的な事業を行った〔以上、ハイシッヒ著・田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』、岩波書店、1967 年、20-33 頁／2000 年文庫版 32-49 頁参照〕。1943 年に 42 歳の若さで死去したブフヘシグの死因は、現在にいたるまで不明のままである。

私はこの偉大な作家の長編歴史小説『青き年代記』の手稿（写本）、その異本、さらに別の作品の手稿（写本）の探索を間断なく進めてきた。最近（2019 年の秋と冬）の状況では、一つの新たな探索を進めてもらっているところである。この探索にしたがって、本発表では、日本国に所蔵されているのではないかと思われる偉大な作家ワンチンバリーン・インジャンナシのいくつかの作品の手稿（写本）とそれに関連する資料について述べたい。